

希望

この手に

沖繩の貧困・子どものいま

第3部⑭

リラックスした雰囲気の中で生徒がスタッフと雑談できる「相談室うーばー」=5月、大阪府立桜塚高校



授業が終わるベルが鳴ると、生徒たちが次々と茶室の畳間にやって来る。「お帰りー」「今日もバイトやったん？」と迎えるスタッフの目が、一人の青年の姿にぼっと輝いた。「久しぶりやな！」。在学中、毎日のように通っていたという卒業生だ。青年は「まだあそこ働いてんで、めっちゃ忙しいわ」と

大阪・高校内居場所

笑顔に自信をのぞかせた。大阪府立桜塚高校(豊中市)定時制、通称「夜校」では2012年から週に数回「相談室うーばー」と看板を掲げた高校内居場所が開かれている。運営するのは一般社団法人キャリアブリッジ(同市)。スタッフ2~3人が生徒の話し相手になり、バイトの相談にも乗る。生徒たちは

しい世帯が多く、いじめられた経験がある生徒も多いという。「『だめ』『あかん』と言われ続けてきたのさ。自分に対する諦め感が染み付いている。人として尊重される体験をし『どうせ自分なんかない』と思わずに済むようになつてほしい」とボランティアスタッフの辻佳美さん(29)は対等な関係づくりを重視す

援者、それぞれの視点で見えるものがある。ぶつかることもあるが、対立しては生徒のためにならない。「生徒のため」という目的を意識することなども大事だとキャリアブリッジ理事の白砂明子さん(44)も語る。昨年には、学年や進路の会議に出席するまでに信頼関係をつくり上げ、情報共有しながら両者が一体

キャリアブリッジを含む8団体が21校で展開した。現場の評価は高く、府も継続に前向きだ。ただ、取り組みを支えるのは13、14年度の緊急雇用創出事業、15年からは地方創生交付金と、その時々で異なる予算だ。今年度は事業費が3割以下とされた上、スケジュールも遅れ、事業開始は秋ごろになる見込みだという。その間に、生徒の学校への定着を左右し、効果的な働き掛けができる4~6月の時期が過ぎていく。府政策企画部・青少年課の小林克宏課長補佐は「一定の成果が出ていることは明らかで、方向は間違っていない。安定して運用できるように制度化することが必要だ」と話す。

中退防止へ民間活用

尊重される体験で成長

ここで力を蓄え、教室に戻る。数分の休み時間ごとに通う生徒もおり、昨年度の利用者は在籍者の3割に当たる約50人。延べ数は千人を超えた。同じスタッフで何年も続けることで、冒頭の卒業生のように「帰る場所」にもなっている。

夜校は、在校生の3分の2がひとり親世帯。経済的に厳

る。中退率減少などの数字はまた出ていないが「生徒は教員には言えない話をして気持ちを落ち着けて教室に入る。確実に生徒の成長を支えている」と藤下功一教諭は手応えを語る。

当初は学校側に居場所の必要性が理解されず、民間団体を校内に入れることへの抵抗感もあったという。教諭と支